

## 前期日程

平成 31 年度入学試験問題（前期日程）

# 国語

（教育学部）

————— 解答上の注意事項 —————

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子 1 冊と解答紙 2 枚がある。
- 3 問題は 3 問ある。（すべての問題に解答すること。）
- 4 問題の解答は、解答紙の所定の解答欄に記入すること。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

— 次の【文章Ⅰ】(上段)と【文章Ⅱ】(下段)をよく読んで、後の問いに答えなさい。なお、出典はいずれも船木亨著『現代思想講義』による。(設問の都合上、原文を一部改めたところがある。)

### 【文章Ⅰ】

あるひとたちは、AIの普及が管理社会を生み出すとか、個人のプライバシーがなくなってしまうとか、人間が機械に支配されるようになるとか、人間の仕事が奪われるとかいって、盛んに<sup>ア</sup>ケイショウを鳴らしている。

それは間違っていないと思うのだが、もっと大きな問題がある。それは、ひとびとの不安を、AIは解消してくれそうにもないということである。

たとえば、わたしが失業しそうになって「うつ」の症状が出ているとしても、もしAIが普及していたなら、その判断はどのようなものになるであろうか。転職の条件や状況について、あるいはどんな薬を服用すればいいかについては、正しい判断を与えてくれるだろう。だが、がんばれないわたしが、資本主義の根本的問題や社会ホシヨウ政策の問題点などを考察しながら、自分の将来の目標を合理的に決定せず、したがってその適切な手段を実行しようとするなら、——「愚行権」といってもいいが——、それに対しては、どんなアドバイスをしてくれるだろうか。

AIは、「成りゆきまかせ」や「いちかばちか」や「横並び」や「放置する」や「なし崩しにする」や「破壊してもいい」といったタイプの動機に対して、どんなアドバイスをしてくれるだろうか。

### 【文章Ⅱ】

もし統計学に問題があるとすれば、それは、「みんなとおなじでそれでいい」という発想、全体における自分の立ち位置が分かればそれでよいとする発想が蔓延まんえんするという点にある。いいかえると、ひとびとが思われなくなるという点にある。ひたひたと押し寄せる統計の波に、われわれはみな溺れかけている。

ひとびとが読む本は、身体の調子をよくする本、人間関係をよくする本、出世するための本、成功するための本、金持ちになるための本、子どもを育てるための本、老後の暮らしを設計するための本……、すべて、ひとびとが気にしていることだ。しかも、そのなかのベストセラー、みんなが読む本だけが読まれるのだ。

ひとびとを襲う不安の想像は、数えきれない統計によって、あたかも霧が晴れるように消散し、それぞれのひとは自分が平均に近ければ安心して、自殺であれ、犯罪であれ、極端なものがあってもやむを得ないと考える——それが、いわば自殺論的思考である。ひとが何を感じ、何を考えようと、その行動や生活は、いずれにせよ正規分布\*のなかに納まってしまふ。極端なものに問題があるとすれば、それを解決するのは行政や国会の仕事なのである。

したがって、今日では、正規分布が神の位置に取って代わって君臨し

まして、ひたすら親との確執に苦しんでいるひとや、他人を支配しようとすることばかりに注力しているひとなど、他人の判断をまったく受け入れる姿勢のないひとたちの抱えている問題に対しては、そもそもどんなアドバイスがあり得るだろうか。

AIは、マザー・コンピュータではない。つまり、母親のように、あなたを気にかけてはくれない。AIには、人類の未来や個人の将来を心配し、社会的諸条件と一人ひとりの意識を調停しようとする性質が原來的にない。そのことの方が、もつと問題である。

AIは判断を創出しているのではなく、ひとびとのあらゆる判断を、ひとが感覚できないものまでのさまざまなデータを含め、——急ぐことでは「エッジ・コンピューティング」として自前のメモリで対応するが——、ネット上のクラウドを介して繋がりがあって、ひとが記憶できないほどの大量のデータ(ビッグデータ)を用いてシミュレートするだけである。

正しい判断をするのではなく、正しいとされた判断をさらにデータとしてインプットして、正しいとされる判断の確率を上げていくだけだ。AIスマートロボットがギャグをいうにしても、それは世界中のひとたちの笑いの反応をクラウドを通じてフィードバックしているからであって、それらにとってはちっともおかしなことではないのである。

AIにとって、人間は光学センサーの眼のまにに在るのではなく、クラウド(群集)という霧もやのなかにいて、クラウド上のデータのなかから抽出される統計的存在者でしかない。正しさを判断するのはどこまでいっても人間であり、そもそも「正しさ」は人間にとってのものでしかない。

<sup>A</sup>機械にとっての正しさは、精確に作動すること、バグがないことでしたか

ているとわかっていい。人間の生き方でも、出来事の起こり方でも、すべて統計をとれば正規分布のカーブを描き、ひとびとはそのカーブの中央付近に位置づけられれば安心し、そこから離れるにつれて不安になる。そうでないひとが隣にいたら、自分から切り離そうとしていじめたくありません。

AI機械のネットワークが広範に普及し、ありとあらゆる機械と人間とがその部品としてそれにぶらさがるようになりつつあるいま、写真や動画を通じて与えられる快とおなじ快を追体験することで、「みんなおなじでみんないい」と呼びかけあうSNSの世界があたりまえになってきた。

こうした世界——生命政治が国家主義に見えるのに対し、SNSはモラルハザード、いわば道徳的アナキズムに見える。一見、対立しているかのようである。SNSのメッセージは、統計に対抗して個人の意見を発しているともいえるわけだが、しかしその統計がとられ、とられた統計が前提されることで、「個人」が相殺されてしまう。生命政治は統計を使用した政策を構想するが、SNSはそれ自体が統計的現象であって、それをも対象に政策が構想される。生命政治によって優生学的に社会的弱者が選別されることと、社会的弱者に対するSNSの差別や炎上やヘイトスピーチは、なるほど連動しているわけである。

それを「みんな」と呼ぶのだが、ひとは、自分のことを理解するときも、出来事がどこへ向かうかを知ろうとするときも、統計が教える確率によって判断する。事実よりも、経験を共有することに価値がある。悩みがあれば、専門家のところに行くのではなく、ネットで探し、悩んで

ないのだ。誤りも、ただ訂正すべきデータにすぎず、それらにとっては、恥ずべきことなのではない。

したがって、もしAIにありとあらゆる判断を任せてしまおうとしたら、それは確かに何らかの判断を示さだろうし、その判断は、いずれにせよ多くのひとが納得する妥当な判断ではあるだろうが、しかしそこに「未来」はない。

未来とは、現在よりもよい状態になっているはずの、これから先のあの時点のことである。単に時間の未来ということであれば、いつの時代にも未来はあるが、それはひとが期待して、それに向かって努力しようとする「未来」ではない。AIの説く未来は、現在の延長でしかない。

AIの前提する未来においては、ただ時だけが刻一刻と経ち、暦がその数を積み上げていく。それは、時間測定法における未来であって、われわれの「未来」ではない。そこに夢や希望はない。未来という語が夢や希望という語と相重なっていた時代は終わり、未来という語で、せいぜい似たような要素がくり返し姿を現す退屈な現在か、あるいはいたるところ、現在の廃墟はいきょとしての、破滅と悲惨とが組み込まれた疑似過去が待ち受けるばかりとなる。

AIの判断は外挿法的シミュレーションであり、過去に起こったことを未来に引き伸ばして予想する、その推測を詳細にテッテイウしたものである。ルールがあつて条件の変化しないものに対しては最強であるが、あり得ないことに挑戦するとか、いつもと違ったことをやってみるといふ判断は、そこにはない。ところが、そうした異例のことをなそうとす判断の向こうにこそ、人間の考える「未来」がある。

いるひとたちと、それに回答しているひとたちの断片的な物語で安心する。

これが「ポスト・トゥルース(脱真理)」の実態である。エリートたちの統計重視がひとびとを訓育し、専門家たちの知識の価値が失墜した。ひとびとは、<sup>\*</sup>コンテンツ連動型やターゲット型型の配信によって<sup>\*</sup>キュレーティングされて、自分が読みたいニュースのみを送り届けるネットワークスや、ネットの友人の友人たちによる噂話うわさばなしを信じようとする。そして、ジャーナリズムの、専門家によつて裏づけられたニュースを否定して、それを「フェイクニュースだ」といったりするのである。

ひとびとは、実際の統計調査なしにでも、それぞれの自分の意見が正規分布の中央にくるものと想定し、他の意見の一切を、その両端に位置づけて見ているようである。その結果、自分の身の回りでしかいえないことが、自分は平均的であるとの信念だけで、真理とおなじ扱いを受ける。因果論的必然性ばかりでなく、論理的必然性までもが捨てられる。

注 自殺論的思考……ここでは、社会に一定数の「極端なもの」が出る

のはやむを得ないとする思考。社会学者・デューク大学の研究『自殺論』に基づく。デューク大学は「自殺率は集団の凝集力に反比例して増加する」という定式を立てた。

正規分布……確率分布の一つ。平均付近が一番高く、平均から離れるにつれて緩やかに低くなっていく、左右対称な分布。ベール型分布。

生命政治……ここでは、十八世紀末に生じてきた、新しい医療制

ルーティン化した業務における判断に対し、その判断の帰結から生じる悲劇についての感性こそが、人間の判断を賦活して、いつもとは異なった判断へとひとを差し向ける。夢や希望という名のもとに、明確なイメージがないとしても、ひとはそれぞれに「未来」に向けて判断しており、その場の「課題の解決」だけを考えているわけではないのである。

AIが普及するということは、社会におけるさまざまな業務の運営が自動化され、人間からするとすべてが成りゆきまかせで何とかなるようになるということである。そこには、判断に意義を与えてきた「<sup>B</sup>未来」を考える人間がいなくなってしまう。

だから、わたしがAIに心配するのは、AIが人類を未来の消失から救ってくれそうもないということなのだ。むしろ、それに<sup>E</sup>カタンする装置なのではないかということだ。

注 エッジ・コンピューティング……コンピューターネットワークに関する技法の一つ。

度や人口政策を最優先する政治のこと。個々の人格をもった存在としてではなく、生物の一種として人間を捉える。生命政治論では、医療制度や人口政策において人間性が否定されるようになっていく経緯が検討される。

道徳的アナキズム……「アナキズム」は、ここでは国家の政治的権力が無効化され、個人の自由が絶対化されるさま。

コンテンツ連動型やターゲティング型……いずれもインターネット広告の掲載手法。

キュレーション……ここでは、インターネット上における情報の整理・分類。

問一 二重傍線部ア、工のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 AIの判断の長所と短所を説明した一文として最も適切な箇所を【文章Ⅰ】から八〇字以内で探し、はじめの五字を抜き出しなさい。

問三 傍線部A「機械にとつての正しさは、精確に作動すること、バグがないことでしかないのだ」とあるが、これに対して、「人間にとつての正しさ」は、どのようなことだと想定されるか。簡潔に説明しなさい。

問四 【文章Ⅰ】では「未来」という語が複数用いられているが、その中には、例えば傍線部Bのように、あえてかぎ括弧を付した箇所も見られる。このように表記した筆者の意図について、本文の内容を踏まえ一〇〇字以内で述べなさい。

問五 次に示すのは、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んだあとの、春村先生、夏川さん、秋山さんのやりとりである。これを読んで、後の(1)(2)に答えなさい。

春村先生 この二つの文章から読み取れる筆者の主張について、キーワードとともに発表してください。

まず、夏川さんからお願いします。

夏川さん 私が選んだキーワードは「不安」です。AIの判断に任せるのも、正規分布の中央に行きたがるのも、背景にいつもとちがうことや、他の人と異なることをすることに對する不安があるからだと思います。その不安というのは、統計学的な考え方によってもたらされたものであるということ、筆者は言いたかったのではないかと考えました。

春村先生 夏川さんの意見について、何か質問はありますか。

秋山さん そのような私たちの「不安」を解消するには、どうすればいいのでしょうか。

夏川さん 現代の不安は、「平均から離れている」という事実から生み出されていると筆者は言っています。だとすれば、いったん統計や平均という思考様式自体から距離をとらないと、不安から逃れるのはむずかしいと思います。一度安心したとしても、すぐに別の平均値が気になってしまうのではないのでしょうか。

春村先生 その「不安」に関する具体例が知りたいのですが、夏川さんは、何か筆者の言うような不安を感じることはありますか。



夏川さん 正直なところ、筆者の言う「不安」を意識したことはありませんでした。でも、みんなが読んでいる本を読むという点や、（ ）と  
いう点は、自分にも思い当たるところがあります。

(1) ( ) にあてはまる具体例を、解答欄に合わせて二〇字以内で書きなさい。

(2) 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、あなたはどのようなことを考えましたか。あなたの考えを一六〇字以内で記述しなさい。ただし、次の点に注意すること。

- ・【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の内容を踏まえて書くこと。
- ・文章中の語句を適切に用いること。
- ・夏川さんの最初の発言(波線部)のように、はじめにキーワードを提示すること。
- ・キーワードは、文章中の語句から選んでも自分で考えてもよい。
- ・解答の文体は、話し言葉でも書き言葉でもよい。

二 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変した箇所がある。)

近きころ、山に仙命聖人とて貴き人ありけり。その勤め、理観を旨として、常に念仏をぞ申しける。

ある時、持仏堂にて観念する間に、空に音ありて、「あはれ、貴き事をのみ観じ給ふものかな」と云ふ。あやしみて、「誰ぞ、かくはのたまふぞ」と問ひければ、「我は当所の三聖なり。」<sup>①</sup>発心し給ひし時より、日に三度あまがけりて、守り奉るなり」とぞ答へ給ひける。

この聖、更に、みづから朝夕の事を知らず。一人使ひける小法師、山の坊ごとに一度廻りて、一日の餉を乞うて養ひけるほかには、何も人の施を受<sup>せ</sup>けざりけり。時の後の宮、願を発して、世に勝れて貴からん僧を供養せんところざして、あまねく尋ね給ひけるに、この聖のやむことなき由を聞き給ひて、即ち、御みづから布袈裟を縫ひ給ひて、「ありのままに云はば、よも受けじ」とおほして、とかくかまへて、この小法師に心を合はせてなむ、「思ひがけぬ人の給はせたりつる」とて奉りければ、聖、これを取つてよくよく見て、「三世の仏、得給へ」とて、谷へ投げ捨ててければ、云ふかひなくやみにけり。

大方、人の乞ふ物、更に一つ惜しむ事なかりけり。板敷の板を欲しがる人のありければ、我が房の板を二三枚はなして取らせたりける間に、東塔の鎌倉に住む覺尊上人、得意にて、夜くらき時来たりけるが、板敷の板のなき事を知らずして、落ち入る間に、「あなかなし」と云ひけるを聞きて、「御房は不覺の人かな。もし、さてやがて死なむ事もかたかるべき身かは。『あなかなし』と云ふ終りの言やはあるべき。『南無阿弥陀仏』とこそ申さめ」<sup>B</sup>なんど云ひける。

この仙命上人、かの覺尊が住む鎌倉へ行きたりけるに、とみの事ありて、客人をおきながら、きと外へ行く<sup>ほか</sup>とて、急ぎ出づる人の、さらに内へ帰り入つて、やや久しく物をしたためれば、あやしうて出でて後、跡を見給ふに、万の物に悉く封を付けた<sup>C</sup>り。この聖、思ふやう、「いと心わるきしわざかな。よも、歩きの度にかくしもしたためじ。我を疑ふ心にこそ。はやかへれがし。この事を恥ぢしめむ」と云ふ。

かく思ひたる程に、<sup>③</sup>帰り来たれり。思ひまうけたる事なれば、見付くるや遅しと、この事を云ふ。覺尊の云はく、「常にかくしたたむるに非ず。又、人の物を取るを惜しむにも非ず。されども、御房のおはすれば、かく取りをさめ侍るなり。その故は、もし、これらいささかも失せたる事あらば、凡夫なれば、自ら御房を疑ひ奉る心のあらん事の、いみじう罪障ありぬべく覚えて、我が心の疑はしさになむ。何ばかりの物をかは、惜しみ侍らん」とぞ云ひける。

かくて、鎌倉の聖さきに隠れぬと聞きて、「必ず往生しぬらむ。物に封付けし程の心のたくみなれば」とぞ仙命聖人は云ひけれ。

その後、夢に覺尊にあへり。先づ初めの詞には、「何れの品ぞ」と問ひければ、「下品下生なり。それだにも、ほとほとしかりつるを、御房の御徳に



往生とげたるなり。日ごろ、橋を渡し、道を作りし行ばかりにては、叶はざらまし。御すすめによりて、時々念仏をせしかば」とぞ云ひける。又云はく、「仙命、往生は叶ひなむや」と問ふ。「その事、疑ひなし。はやく上品上生じやうほんじやうじやうに定まり給へり」と云ふとぞ見えたりける。

(『発心集』より)

注 理観……仏教の修行法の一つ。万物の理法そのものを観察する。

観念す……心を集中して仏の教えの真理を観察し思考すること。

三聖……釈迦・弥陀・薬師の三如来。

朝夕の事……日常のこと。

坊……僧の住む建物。

餉……食料品。

供養ぜん……衣服や飲食物などを提供しよう。

三世の仏……前世・現世・来世の三世に出現する仏たち。

房……「坊」と同じ。

得意にて……親友であつて。

仙命上人……仙命聖人と同じ。

かへれがし……帰って来てくれ。

罪障……往生の妨げとなる悪い行為。

品……階位。

ほとほとしかりつるを……かろうじて得た階位だが。

問一 二重傍線部①～③の主語を本文中の語で答えなさい。

問二 波線部「往生しぬらむ」を品詞分解し、文法的に説明しなさい。(品詞名だけでなく、活用のある語は基本形と活用形、助動詞は意味、動詞は活用の行と種類を記すこと。)

問三 傍線部A「ありのままに云はば、よも受けじ」について、なぜそう思ったのか、わかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部B「御房は不覚の人かな」について、誰のどのような行為を非難した言葉か、わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部C「いと心わるきしわざかな」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 仙命は、なぜ「心わるきしわざ」だと思ったのか、説明しなさい。
- (2) 覚尊が「心わるきしわざ」と思われるようなことをした理由は何か、説明しなさい。

問六 最後の段落で仙命と覚尊が自分たちに定められた「品」について話している。「品」について次の問いに答えなさい。

- (1) この文章では何における階位を表していると考えられるか、具体的に説明しなさい。
- (2) 一人は「上品上生」、もう一人は「下品下生」になったが、それぞれどういう行為によってそうなったと考えられるか、文章全体を踏まえて説明しなさい。



三 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省略したところがある。)

吾<sup>ガ</sup>閩<sup>ビン</sup>郷<sup>キヤウノ</sup> 諺<sup>コトワザニ</sup> 有<sup>下</sup>「三代不<sup>レ</sup>養<sup>レ</sup>猫、全家無<sup>二</sup>病耗<sup>一</sup>」之語<sup>上</sup>。

聞<sup>クナラク</sup> 福清有<sup>ニ</sup>葉叟<sup>セフソウナル</sup>者<sup>一</sup>、台山相<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>之後<sup>ノ</sup>人也<sup>ト</sup>。素<sup>もとヨリ</sup>憫<sup>あはレミ</sup>鼠<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>畜<sup>レ</sup>猫<sup>ヲ</sup>。年四十余<sup>ニシテ</sup>、

忽<sup>①</sup>於<sup>イテ</sup>春<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>患<sup>フ</sup>噎<sup>エツ</sup>証<sup>シヤウヲ</sup>。至<sup>リテ</sup>冬<sup>ニ</sup>益<sup>ニ</sup>劇<sup>ハゲシク</sup>、薄<sup>うす</sup>粥<sup>ガユモ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>下<sup>ス</sup>咽<sup>ノ</sup>。自<sup>ラ</sup>分<sup>ニ</sup>必<sup>ズ</sup>死<sup>セント</sup>、長夜不<sup>レ</sup>寐<sup>イネ</sup>、

燃<sup>ヤシテ</sup>灯<sup>ヲ</sup>枯<sup>ス</sup>坐<sup>ス</sup>。

適<sup>たまたまつく</sup>凡<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>炒<sup>イリ</sup>米<sup>ゴメノ</sup>半<sup>ナル</sup>瓶<sup>一</sup>。群鼠欲<sup>シ</sup>竊<sup>ぬすマント</sup>食<sup>ヲ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>入<sup>ル</sup>口<sup>ヨリ</sup>。俄<sup>にはカニ</sup>有<sup>ニ</sup>一<sup>リテ</sup>鼠<sup>クハヘ</sup>銜<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>箸<sup>ヲ</sup>、植<sup>たテ</sup>

瓶<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>口<sup>ヲ</sup>咬<sup>カム</sup>箸<sup>ヲ</sup>。又<sup>一</sup>鼠<sup>ヘテ</sup>銜<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>尾<sup>ヲ</sup>而<sup>レ</sup>曳<sup>ヒキ</sup>之<sup>ヲ</sup>、瓶<sup>ニ</sup>遂<sup>ニ</sup>倒<sup>ル</sup>。群鼠争<sup>ヒテ</sup>就<sup>キ</sup>食<sup>ニ</sup>、嘯<sup>せう</sup>呼<sup>コシテ</sup>為<sup>ス</sup>樂<sup>シミヲ</sup>。

葉叟觀<sup>テ</sup>之<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>覺<sup>エ</sup>大<sup>イニ</sup>笑<sup>ヒ</sup>、略<sup>かく</sup>出<sup>シ</sup>一<sup>ニ</sup>赤<sup>ヲ</sup>物<sup>一</sup>、如<sup>ニ</sup>新<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>小<sup>セウ</sup>孩<sup>ガ</sup>之<sup>ノ</sup>拳<sup>ノ</sup>。頓<sup>とみ</sup>覺<sup>エ</sup>胸<sup>ノ</sup>前<sup>ノ</sup>清<sup>ナル</sup>爽<sup>ヲ</sup>、遂<sup>ニ</sup>

能<sup>③</sup>吃<sup>キツシ</sup>粥<sup>ヲ</sup>、旬<sup>ニ</sup>日<sup>ニシテ</sup>全<sup>テ</sup>愈<sup>イユ</sup>。

又四十余年<sup>ニシテ</sup>而<sup>レ</sup>考<sup>ス</sup>終<sup>ス</sup>。按<sup>ズルニ</sup>此<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>亦<sup>ダ</sup>甚<sup>ナリ</sup>小<sup>ナリ</sup>、然<sup>ルニ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>カ</sup>謂<sup>フ</sup>非<sup>ズト</sup>適<sup>フニ</sup>逢<sup>フニ</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>イニ</sup>也<sup>一</sup>。

(『北東園筆録』による)

注 閩……地方の名。

枯坐……ぼんやりと坐る。

福清……地名。

嘯呼……大声で呼び、叫ぶ。

葉叟……葉という姓の老人。

咯出……喉につかえていたものを吐き出す。

台山相国之後人……台山出身の宰相の子孫。

小孩……小児。

噎証……喉がふさがる病気。

考終……天寿を全うする。

分……判断する。

按……考えてみる。

問一 傍線部①～③の文中における読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記しなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問二 傍線部Aを書き下し文に改めなさい。(仮名遣いは新旧どちらでもよい。)

問三 傍線部Bに「瓶遂倒」とあるが、瓶はどのようにして倒れるに至ったのか、具体的に述べなさい。

問四 「葉叟」の病は、どのような段階を経て、傍線部C「清爽」の状態に至ったか。以下の(1)、(2)、(3)の三つの段階に即して説明しなさい。

- (1) 鼠たちの一連の行動を観察する前
- (2) 鼠たちの一連の行動を観察した後
- (3) 右の(2)の結果

問五 傍線部D「逢其報」とは、どのようなことをいっているのか。本文全体を踏まえ、その具体的な内容が分かるように、答えなさい。